

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00655

研究課題名(和文) ラベル付け理論の精緻化と動詞句内主語構文の統語的分析

研究課題名(英文) Elaboration on Labeling Theory and VP-Internal Subjects

研究代表者

谷川 晋一 (TANIGAWA, Shin-ichi)

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：20585426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、Chomsky (2013, 2015) が提唱するラベル付け理論において、(i)標準的な主語位置に現れる非名詞句・非主格句が機能主要部Tとどのようなagreementを行うのか、(ii)動詞句内に残る主語・主格名詞句はどのようにして距離的に離れている主要部Tとagreementを行うのか、を明確にすることである。(i)については、素性継承の結果、話題素性のagreementもしくはphi素性に関する部分的なagreementがあることを示した。(ii)については、距離的に離れている2要素間でも同一位相内であればC統御に基づきagreementが行われるという結論を導いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

標準的な主語位置に現れる要素は機能主要部Tとagreementが必須であるとされているにも関わらず、英語の倒置構文や日本語等の与格主語構文については、この点に関して深い議論がなされていなかった。また、これらの構文は、以前は盛んに議論されていたものの、近年は研究の対象から外され、以前ほど着目されなくなっていたのも事実である。本研究は、そのような構文に再度、焦点を当てた上で、agreementを中心にラベル付け理論の精緻化を行ったものである。本研究の成果は、統語論研究、特にラベル付け理論を用いた今後の生成統語論研究の発展に一定の寄与ができるはずである。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the Labeling Theory advocated by Chomsky (2013, 2015) by elaborating on (i) how non-nominals and non-nominatives located in the canonical subject position undergo agreement with the functional head T and (ii) how nominal subjects and nominatives remaining within the VP-domain undergo agreement with the functional head T despite their distant relation. Regarding (i), it argued that the relevant elements are subject to agreement of topic feature or partial agreement of phi-features. As for (ii), it concluded that the c-commanding relation suffices to agreement between the two distant elements provided that they are accommodated in the same phase domain.

研究分野：生成統語論

キーワード：ラベル付け理論 agreement 動詞句内主語構文 動詞句内主格構文

1. 研究開始当初の背景

Chomsky (2013, 2015) によって提唱されたラベル付け理論では、標準的な主語位置としてみなされる T 指定部に位置する要素は、機能主要部 T との間で agreement を行わなければならない、適切な agreement が行われないと、統語派生が収束しない。例えば、“John saw Mary.” のように、名詞句 *John* が T 指定部に位置する文は、(1) に示す派生を持つ。

(1) [_γ C [_β John_[φ] T_[uφ] [_α t_{John} saw Mary]]]

名詞句 *John* は、もともと α で示す動詞句相当の句の中に基底生成されるが、その位置から T 指定部へ移動する。この移動により、*John* は、機能主要部 T と同一の領域 β に入り、局所的関係を構築する。そして、この 2 つの要素は、人称に関わる ϕ 素性_[φ] を共通に持つため、局所的関係にある 2 要素が共通する素性を持つことにより、 ϕ 素性に関する agreement が行われる。

上がラベル付け理論において、T 指定部と T の間に想定される規範的な agreement の仕組みであるが、この仕組みに関して大きな問題となるのが、場所句倒置構文の “On the bed lay a cat.” や虚辞構文の “There lay a cat on the sofa.” のような、いわゆる、動詞句内主語構文である。これらの文では、(2)-(3) に示すように、*a cat* のような主語名詞句が動詞句内に残る一方で、前置詞句や虚辞 *there* が T 指定部を占めると考えられてきた。

(2) [_γ C [_β on the bed T_[uφ] [_α lay a cat_[φ] t_{PP}]]]

(3) [_γ C [_β there T_[uφ] [_α lay a cat_[φ] on the sofa]]]

T 指定部に位置する前置詞句と虚辞は、名詞句と異なり、活発な ϕ 素性や完全な ϕ 素性を持つわけではない。前段で述べた前提「T 指定部に位置する要素は、機能主要部 T との間で agreement を行わなければならない統語派生が収束しない」に照らすと、これらの構文の派生を議論するには、T 指定部に位置する前置詞句や虚辞が主要部 T とどのような agreement を行うのか、という点を明確にする必要がある。また、これらの文において、活発で完全な ϕ 素性を持つのは、動詞句内に残留した主語名詞句 *a cat* であるが、対となる ϕ 素性を持つ主要部 T とは距離的に離れているため、(1) の場合と異なり、当該の 2 つの要素が局所的な関係にない。従来枠組みでは、明確に認められていたが、ラベル付け理論でも局所的な関係にない要素同士が agreement を行えるのか、という点が十分な議論がされないままに問題として残っている。同様の問題は、「John には、ドイツ語ができる」のように、与格名詞句が T 指定部に現れ、主格名詞句が動詞句内に残ると考えられる動詞句内主格構文 (与格主語構文) にも当てはまる。

上記の問題点や動詞句内主語構文は、かつての生成統語論の枠組みに遡ると、活発な論争的となっていたものの、近年は分析対象となることがめっきり少なくなってきたというのが実情である。しかしながら、これらは、agreement の仕組みやその重要性を強調するラベル付け理論全般を精緻化する上で、軽視できない問題や現象であり、過去に立ち戻る考察を交えた深い議論を行うことが必須である。

2. 研究の目的

動詞句内主語構文は、ラベル付け理論に下記の 2 つの大きな疑問を投げかける。

- (i) T 指定部に現れる非名詞句は、主要部 T とどのような agreement を行うのか。
- (ii) 動詞句内に残留する名詞句は、どのようにして距離的に離れている主要部 T と ϕ 素性の agreement を行うのか。

本研究の目的は、これら 2 つの間に一定の答えを出すことである。ラベル付け理論において、重要視されているにも関わらず深い議論が欠けている agreement の仕組みについて、これら 2 点を中心に、明確化する。このことにより、ラベル付け理論を精緻化し、過去の理論から現在への理論への橋渡しを行うことで、生成統語理論研究を進展させることが最大の目的である。それに加えて、従来の研究では盛んに議論がなされていたものの、以前ほど着目されなくなった英語の倒置構文、虚辞構文に代表される動詞句内主語構文、加えて、動詞句内主格構文に再び脚光を当てることで、当該構文や当該現象の重要性を再認識させたい。

3. 研究の方法

Chomsky (2013, 2015) のラベル付け理論内で提案されている素性継承や最小探索等の操作を援用しつつ、agreement の仕組みに関する不十分な点を過去の理論的枠組みから補いながら、研究を行う。具体的には、Chomsky (2000, 2001) で提唱された、いわゆる、*Agree* 理論を再検討し、その仕組みや定義がラベル付け理論においても援用されるべきかについて明らかにする。

Agree 理論では、Chomsky (1995) 等の枠組みと異なり、agreement に参与する 2 つの要素は、必ずしも距離的に近い姉妹関係等にある必要はなく、同一の領域に入ることが義務的ではない。派生の単位である位相 (phase) 内において、対となる素性を持つ状態で C 統御の関係にあればよい。これが Probe-Goal を基にした素性照合操作 *Agree* である。

Chomsky (2013, 2015) もラベル付け理論における agreement の仕組みを精緻化するには、*Agree* 理論を深く吟味することが重要だと述べている。本研究では、その示唆に従い、agreement の重要性に焦点を当てた理論的枠組みである *Agree* 理論に再び光を当て、ラベル付け理論との比較を行いながら、研究を進める。

4. 研究成果

<研究成果 1> C から T への素性継承

2018 年 5 月と 2019 年 8 月に行った学会発表及びそれらのプロシーディングス論文 (Tanigawa (2019a, b)) において、C から T への素性継承に関する新しい提案を行った。

一般的な素性継承の過程は、(4) に示す通り、人称に関わる ϕ 素性は、本来的に主要部 C にあるが、それを T が継承するというものである (本稿では、素性が継承される前にもともと存在していた位置を $[\text{u}\phi]$ のような点線の記号で表す)。

(4) $[_\gamma C_{[\text{u}\phi]} [\beta \text{John}_{[\phi]} T_{[\text{u}\phi]} [\alpha \text{saw Mary}]]]$

このように C から T へと継承される素性は、典型的には、 ϕ 素性であるが、素性継承は、 ϕ 素性だけに限定されるとは限らない。Chomsky (2013, 2015) が示唆するように、 ϕ 素性に加えて、疑問に関わる Q 素性が C から T へ継承される場合もあると考えられる。例えば、“Who did John see?” のように、目的語等が疑問詞の場合、(5) に示すように、Q 素性 [Q] が主要部 C にとどまり、C 指定部へ入る疑問詞 *who* との間で Q 素性の agreement が行われる。

(5) $[_\gamma \text{who}_{[\text{u}Q]} C_{[\text{u}\phi][Q]} [\beta \text{John}_{[\phi]} T_{[\text{u}\phi]} [\alpha \text{see } t_{\text{who}}]]]$

その一方で、“Who saw Mary?” のように、主語が疑問詞になる場合、(6) に示すように、Q 素性が C から T へ継承され、T 指定部の要素と主要部 T との間で、 ϕ 素性に加えて、Q 素性の agreement が行われると分析可能である。

(6) $[_\gamma C_{[\text{u}\phi][Q]} [\beta \text{who}_{[\phi][\text{u}Q]} T_{[\text{u}\phi][Q]} [\alpha t_{\text{who}} \text{saw Mary}]]]$

本研究は、Tanigawa (2017, 2018) の提案に従って、(6) に示した素性継承に関する仕組みを話題化構文に応用する提案を行った。話題化構文とは、既に文脈に上がっている話題要素を文頭に置く構文である。例えば、“Her, John saw.” のように、目的語 *her* が話題であり、主語に先行する形で文頭に現れている話題化構文は、生成統語論の枠組みで表すと、(7) に示す派生を持つと仮定される。

(7) $[_\gamma \text{her}_{[\text{u}Top]} C_{[\text{u}\phi][Top]} [\beta \text{John}_{[\phi]} T_{[\text{u}\phi]} [\alpha \text{saw } t_{\text{her}}]]]$

この場合、話題を表す Topic 素性 [Top] が主要部 C にとどまり、C 指定部へ移動してくる話題要素 *her* との間で Topic 素性の agreement が行われると分析できる。これを踏まえて、“He saw Mary.” のように、主語が話題要素である話題主語に目を向けると、上述の主語が疑問詞になっている文と同様の分析が可能であることがわかる。すなわち、(8) に示すように、 ϕ 素性に加えて、Topic 素性が C から T へ継承され、T 指定部の要素と主要部 T との間で、 ϕ 素性と Topic 素性の 2 種類の agreement が同時に行われると分析可能である。

(8) $[_\gamma C_{[\text{u}\phi][Top]} [\beta \text{he}_{[\phi][\text{u}Top]} T_{[\text{u}\phi][Top]} [\alpha t_{\text{he}} \text{saw Mary}]]]$

研究成果 1 は、C から T への素性継承に上記の提案を行うことにより、研究目的 (i) 「T 指定部に現れる非名詞句が主要部 T とどのような agreement を行うのか」を明確化する上で、重要な可能性を指摘する。通常、この環境での agreement は、(4) のように、人称に関わる ϕ 素性の agreement に限定されがちだが、(6) や (8) のように、Q 素性や Topic 素性が C から T へと継承される可能性もあるわけである。したがって、当該環境の agreement には、それなりの幅があるはずであるし、 ϕ 素性の agreement は行われないものの、Q 素性や Topic 素性の agreement は行われるという可能性も考えられるはずである。

<研究成果 2> 動詞句内主語構文の分析

2019年12月に行った学会発表 Tanigawa (2019c) 及びそれを論文化し、現在、査読後の修正を行っている論文 (現時点で未刊行) では、動詞句内主語構文に関する新しい提案を行った。

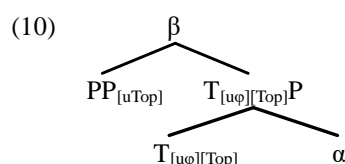
議論を明快に進める上で、動詞句内主語構文の典型である場所句倒置構文 “On the bed lay a cat.” に的を絞って提案を行う。この構文で重要な点は、文頭要素である前置詞句の談話機能である。この構文の文頭要素は、既に文脈に登場している語、もしくは、文脈から想起可能な語を含むため、談話機能上、話題要素として機能することがよく知られている (Biber et al. (1999))。これに基づいて、Stowell (1981), den Dikken, Marcel and Næss (1993) 等の生成統語論を基にした先行研究においては、話題化構文で仮定されるのと同様の話題位置への移動が当該前置詞句に仮定されている。例えば、Tanigawa (2009) では、*Agree* 理論を採用し、前置詞句が T 指定部から C 指定部へ移動し、C 指定部と主要部 C の間で Topic 素性の agreement が行われるという分析が提案されている。本研究では、この分析を研究成果 1 の素性継承の観点から再分析し、以下の派生を提案する。

(9) [_γ C [_{uφ}][_{Top}] [_β on the bed [_{uTop}] T [_{uφ}][_{Top}] [_α lay a cat [_φ]]]]

この派生では、φ 素性に加えて、Topic 素性が C から T へ継承され、Topic 素性を持つ前置詞句が T 指定部に移動している。この構造配列により、T 指定部の要素である前置詞句と主要部 T との間で、Topic 素性の agreement が行われると分析可能である。すなわち、研究目的 (i) 「T 指定部に現れる非名詞句が主要部 T とどのような agreement を行うのか」については、Topic 素性の agreement が行われると結論づけることができる。

(9) の派生で依然として問題として残るのは、動詞句相当 α 内に残留した主語名詞句 “a cat” の agreement をどのように分析するかである。この問題に関しては、Chomsky (2000, 2001) の *Agree* 理論で提案されていた C 統御を基にした agreement が擁護されるべきだと主張する。すなわち、主要部 T は、対となる φ 素性を持つ *a cat* と距離的に離れているが、同一位相内で C 統御をしている。長距離であったとしても、同一位相内での C 統御関係によって、φ 素性に関する agreement が 2 つの要素間で行われるべきなのである。このような agreement がないとすると、主要部 T の φ 素性 [_{uφ}] は、値を与えられないまま残ってしまい、文の派生が収束しないことになる。したがって、研究目的 (ii) 「動詞句内に残留する名詞句は、どのようにして距離的に離れている主要部 T と agreement を行うのか」については、同一位相内での C 統御関係が当該 agreement を可能にすると結論づけることができる。

本研究は、この C 統御による agreement の仕組みを精緻化し、以下に示すように、主要部 T と T 指定部に現れる前置詞句の agreement も C 統御を基に適用される分析を提案する。



(10) において、PP と併合しているのは、T を主要部とする TP であり、結果的に、PP は TP と相互 C 統御の関係にある。T が持つ素性は、最小探索により、TP にも写像されるため、PP と TP が相互 C 統御を行うことにより、対となる Topic 素性の agreement が行われる。

分析 (9) 及び (10) は、場所句倒置構文と同様に動詞句内主語構文に分類される、(11a-c) の Preposing around *be* (主語補語倒置) にも適用されるはずである。

- (11) a. More important has been the establishment of legal services.
 b. Taking tickets at the door was a person I had previously roomed with.
 c. Examined today and found in good health was our nation's first executive.
 (Emonds (1970: 28–31))

これらの文においては、T 指定部に位置する形容詞句や分詞句と主要部 T の間で Topic 素性の agreement が行われる一方で、φ 素性の agreement は、主要部 T と動詞句内の名詞句との間で長距離 C 統御関係を基に、行われることになる。

加えて、本研究は、同分析が虚辞構文 “There lay a cat on the sofa.” や動詞句内主格構文 「John には、ドイツ語ができる」にも適用されると主張する。

(12) [_γ C [_β there T [_{uφ}] [_α lay a cat [_φ] on the sofa]]]

(13) [_γ C [_β John に T [_{uφ}] [_α ドイツ語が [_φ] できる]]]

Richards (2004, 2008) によれば、虚辞や与格名詞句は不完全な ϕ 素性を持つ。ここでも、この仮定に従うと、T 指定部の *there* と *John* は、TP との C 統御関係を基に、主要部 T と ϕ 素性の agreement を行うが、それらが持っている ϕ 素性は、不完全であるために、主要部 T の ϕ 素性 [$u\phi$] は十分な値を与えられないまま残ってしまう。このままだと派生が収束しないが、幸い T が C 統御する同一位相内の領域には、完全な ϕ 素性を持つ *a cat* と「ドイツ語」が存在している。これらの要素と長距離 C 統御の関係を結ぶことによって、主要部 T の ϕ 素性 [$u\phi$] は、完全に充足され、日本語の場合、「ドイツ語が」のように、動詞句内の名詞句に主格「が」が付与もしくは認可されることになる。

研究成果 2 は、Chomsky (2000, 2001) を筆頭に、かつての理論的枠組みで採用されていた C 統御を軸とする長距離 agreement の仕組みが、ラベル付け理論という現在の理論的枠組みにも当てはまるという主旨となる。この仕組みは、ラベル付け理論が提唱されてから十分に妥当化されていなかったため、その妥当化を明示的に行ったという意味において、重要な意義がある。

<参考文献>

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *The Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman, London.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.
- den Dikken, Marcel and Alma Næss (1993) “Case Dependencies: The Case of Predicate Inversion,” *The Linguistic Review* 10, 303–336.
- Emonds, Joseph E. (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*, Doctoral dissertation, MIT.
- Richards, Mark (2004) *Object Shift and Scrambling in North and West Germanic: A Case Study in Symmetrical Syntax*, Doctoral dissertation, University of Cambridge.
- Richards, Mark (2008) “Quirky Expletives,” *Agreement Restrictions*, ed. by Roberta D’alessandro, Susann Fischer and Gunnar Hrafn Hrafnbjargarson, 181–213, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Stowell, Timothy (1981) *Origin of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- Tanigawa, Shin-ichi (2009) “A Split Feature Analysis of Topicalization and Locative Inversion,” *JELS* 26, 299–308.
- Tanigawa, Shin-ichi (2017) “In Defense of the Vacuous Movement Hypothesis for *Wh*-Subjects: Perspectives from the Framework of Chomsky (2013, 2015),” *Studies in English Literature* English Number 58, 57–76.
- Tanigawa, Shin-ichi (2018) “Agreement, Labeling and Sentential Subjects,” *English Linguistics* 34, 302–330.
- Tanigawa, Shin-ichi (2019a) “Eliminating String-Vacuous Movement: C-Deletion and Phasehood Inheritance,” *JELS* 36, 295–301.
- Tanigawa, Shin-ichi (2019b) “Revisiting Topic-Subject/Object Asymmetry from POP,” *Universal Grammar and Its Cross-linguistic Instantiations: Proceedings of the 12th Generative Linguistics in the Old World & the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar*, 527–534.
- Tanigawa, Shin-ichi (2019c) “VP-Internal Subjects/Nominatives and the POP Framework,” Paper presented at *The 3rd Joint Conference of Neo-Grammar Circle (NGC) and Fukuoka Linguistic Circle (FLC)*.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Shin-ichi Tanigawa	4. 巻 workshop & poster
2. 論文標題 Revisiting Topic-Subject/Object Asymmetry from POP	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Universal Grammar and Its Cross-linguistic Instantiations: Proceedings of the 12th Generative Linguistics in the Old World & the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 527-534
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shin-ichi Tanigawa	4. 巻 36
2. 論文標題 Eliminating String-Vacuous Movement: C-Deletion and Phasehood Inheritance	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 295-301
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Shin-ichi Tanigawa
2. 発表標題 VP-Internal Subjects/Nominatives and the POP Framework
3. 学会等名 The 3rd Joint Conference of Neo-Grammar Circle (NGC) and Fukuoka Linguistic Circle (FLC) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shin-ichi Tanigawa
2. 発表標題 Revisiting Topic-Subject/Object Asymmetry from POP
3. 学会等名 GLOW in Asia XII in Seoul and SICOGG XXI (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shin-ichi Tanigawa
2. 発表標題 Eliminating String-Vacuous Movement: C-Deletion and Phasehood Inheritance
3. 学会等名 11th ELSJ Spring Forum (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------